

## メルヴィルとホイットマンの時代——生誕200年を記念して

司会・講師 関西学院大学 橋本安央  
講師 元・関西大学 入子文子  
講師 大阪大学 渡邊克昭  
講師 早稲田大学 堀内正規

Van Wyck Brooks が *The Times of Melville and Whitman* を上梓したのは、第二次世界大戦終結直後の1947年のことであった。その後同書は、全五巻からなる *Makers and Finders: A History of the Writer in America, 1800-1915* の第三巻に位置づけられることになるのだが、副題にもあるように、それは文学史というよりも、「文人史」、すなわち歴史学、神学、政治学の知識人や、芸術家および農民と、文人たちとの交流史、と呼ぶほうがふさわしい、逸話的記述に基づくものである。印象主義的で時代遅れとみなす向きもあるのだろうが、高度に抽象化した文学研究の現状にあって、生々しい人間の生活様式が描かれているさまは、逆に瑞々しくもあり、かつ総体としてのアメリカ文学を記述せんとする筆力は、圧倒的ですからある。本フォーラムは、同書に敬意を表し、その表題を演題に借用させていただくことにした。

1819年に生を享けた Herman Melville と Walt Whitman は、その後、マンハッタンとブルックリンという近隣地域の住民として暮らしつつ、創作活動を展開する。二人が直接的に接点をもった痕跡はみあたらないのだが、それにしてもこの両者は、さまざまに異なる側面をもちながらも、その熱、力強さ、大きさ、広さといった点で、アメリカ文芸の確立期において、たしかに共通する感性の持ち主であった。ブルックスが書名にメルヴィルとホイットマンの名を刻んだ所以は、1840年代から80年代にかけてのアメリカ文芸界における、ある種の時代精神を、二人が体現していたから、ということなのだが、それはすなわち、20世紀のアメリカ合衆国に似つかわしい、新教に基づく民主主義的、農本主義的な姿勢とスケールの壮大を、19世紀の二人のなかにみいだしたということでもあろう。

本フォーラムでは、ブルックスのごとく、通時的に二人の時代を見渡す余裕はないのだが、そうではなく、むしろブルックスが行わなかった作品の細部にわたる分析をつうじて、二人の生誕200年を言祝ぎたい。専門家であれ非専門家であれ、21世紀の極東の島で、アメリカ古典文学を虚心に読むことの意義、およびその価値を、Nathaniel Hawthorne というもう一人の同時代作家もふくめて、あらためて検討したいということである。21世紀の現在から逆照射することで、さらなる読みの可能性を追求する。各登壇者が個別の作品を精読するプロセスを前景化させることをつうじて、古典文学の新たな諸相を描きださんとする営みが、個から普遍に開かれゆく可能態たることを、信じつつ。

### 『ファンショアー』の新たな地平

1828年10月、ホーソンは処女作『ファンショアー』(*Fanshawe*)を匿名で自費出版した。周知のように、この作品は出版当初は好評を得たものの、ホーソンがこの作品の痕跡を徹底的に消すかのような動きをしたために、多くの批評家から「失敗作」のレッテルを貼られてきた。一方、異常なまでのホーソンの振舞いは返ってこの作品が考察に値するものであることを示しているのではと、新たな価値を発見しようとする批評家も出てきた。私も一つの仮説をたててみた。結論を先取りすれば、『ファンショアー』をロバート・バートンの *The Anatomy of Melancholy* (1621) の〈メランコリー〉の風景に置く試みである。

19世紀にロマン派に蔓延した『メランコリーの解剖』熱が海を渡り、エマソン、ソロー、メルヴィルなどにも及んだことはマシーセン指摘の通り。しかしホーソーンの名はそこにはない。メルヴィルとバートンの関係が『白鯨』を中心にすでに批評に確立しているのに対し、ホーソーンとバートンについては（手前味噌で恐縮だが）晩年未刊の作品に私が指摘するまで内外共に皆無であった。だが、ホーソーンが隠し続けたバートンの名が発見された今、この処女作に新たな地平が開けてくる。（入子文子）

蘇るポストヒューマン・バートルビー  
——デリーロの『ボディ・アーティスト』を導きの糸として

メルヴィルの短編の中で、「バートルビー」ほど、専門家でなくとも何かを論じてみたいという抑え難い衝動を引き起こす作品もないだろう。本発表では現代思想家たちがいかにこの小説を受容してきたかを俯瞰した上で、デリーロの『ボディ・アーティスト』（2001年）を補助線として、この問題作を21世紀の現在から逆照射し、新たな読みの可能性を追求してみたい。

発表では、参照先のないバートルビーとタトルの共通性を多角的に検証したのち、異言により不明の領域を拓く彼らのスピーチ・アクトを、独創言語、トートロジー、時間などの視座から考察する。そうした分析を通じて、host と hostage が織りなす「歓待」がいかにメルヴィルの語り手の“humanity”を脱構築し、zoe（剥き出しの生）のごとく無防備で fragile な書写人が、post-anthropocentric な文脈において、いかに潜在力を秘めたポストヒューマンとして蘇るかを描出できれば幸いである。（渡邊克昭）

『白鯨』第1章を読む

“Call me Ishmael.” 名高きこの一文とともに、『白鯨』第1章“Loomings”は幕をあける。この章は、語源抄、引用抄を経たのちに、ぼんやりと立ち現れる、壮大なる織物小説のイントロダクションなのだが、すなわち、物語のプロットが動きはじめる前の、前座に位置づけられる章なのだが、かくてここでは、語り手が捕鯨航海の旅に出帆する所以をめぐる経緯が紡がれる。

脱中心的運動性に支えられた、円環的構造をもつ物語の前説的な文章を読むにあたり、わたしの話はひとつの結論にむかって収斂してゆくことを欲さない。そうではなく、イシューメールと名乗る青年と、その気鬱、自棄、焦燥、饒舌、冗句、高揚、韜晦、暗示にみちあふれた語り口の複層性を、その後のプロットにおける展開と脱線、およびテキスト生成の問題等を参照しつつ、虚心に読み直してみたいと思っている。（橋本安央）

フラジャイル・ホイットマン

ホイットマン——「荒くれ者（roughs）」の一人としてアメリカの民主主義の理想を謳い、その現実の様々な相を（奴隷、娼婦、インディアン、南北戦争を含めて）詩にした詩人、プラトニズム的精神の優位に対して肉体の価値を称揚し、性愛を含めたエロティシズムを肯定し（「アダムの子どもたち」）、ホモセクシャルな主題を初めて取り上げ（「カラマス」）、個体の死を超えた宇宙の根源を謳い上げた、新しい聖書を提示する預言者。しかし、ハードで逞しい武装を解いてみれば、その下には、瑞々しくてやわらかい、震えるような感性が横たわっているように感じる。1860年の『草の葉』第3版で初めて公にされた詩群「カラマス」に、私は tender で fragile な主体の在りようを見てみたい。アカデミックな新たな貢献は到底できないが、ゲイであってもなくても「わかる」ことがらを精読によって読みとる試みを、したいと思う、おそらくナイーブに。（堀内正規）